



令和7年度 果樹情報 第5号

(令和7年5月21日)

福島県農林水産部農業振興課



1 気象概況 (5月前半、果樹研究所)

平均気温は、第1半旬が14.3℃で平年より0.7℃低く、第2半旬が14.3℃で平年より1.4℃低く、第3半旬が17.3℃で平年より1.9℃高く経過しました。

この期間の降水量は56.5mmで平年比136.5%と平年より多くなりました。日照時間は114.1時間で平年比105.6%と平年並でした。

2 土壌水分 (5月15日現在、果樹研究所)

5月15日時点の土壌水分(pF値：果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水)は、深さ20cmで2.4、深さ40cmで2.1、深さ60cmで1.9となっており、適湿状態です(図1)。

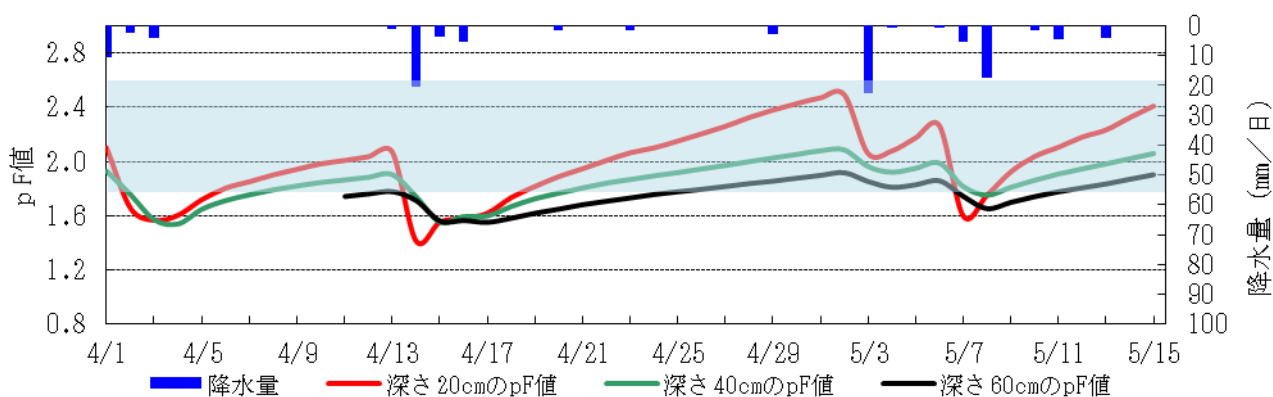


図1 土壌pF値の推移(果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水)

図中の網掛け部は、適湿の範囲(pF1.8-2.6)を示す

3 発育状況 (5月16日現在)

(1) もも

ア 果実肥大

満開後30日における「あかつき」の果実肥大は、縦径が22.0mmで平年比96%、側径が14.3mmで平年比96%とほぼ平年並です。「ゆうぞら」の果実肥大は、縦径が22.7mmで平年比100%、側径が12.7mmで平年比91%と平年並からやや小さくなっています(表1)。

イ 新梢生長

満開後30日における「あかつき」の新梢長は平年比91%と平年より短く、展葉数は平年比101%、葉色は平年比101%と平年並でした。「ゆうぞら」の新梢長は平年比79%と平年より短く、展葉数は平年比112%、葉色は平年比108%とやや高くなりました(表1)。

ウ 双胚果の発生

満開後30日における「あかつき」の双胚果発生率は6.7%で平年(7.2%)よりやや少なく、「ゆうぞら」は27.5%で平年(24.2%)より多くなりました(表2)。

エ 核障害の発生

満開後30日における「あかつき」の核障害発生率は30.0%で平年(36.6%)より少なくなっています(表2)。

オ 発育予測

果樹研究所における、もも「あかつき」の硬核期開始日は、気象庁の気温予報を反映した予測では6月4日ごろで平年より5日早い見込みです(表3)。また、収穫開始日は7月27日で平年より4日早く、収穫盛期日は7月30日で平年より5日早いと予測されます。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右され、今後の気温の推移により大きく変動することがあるため注意が必要です。

表1 ももの果実肥大と新梢生長

果実肥大	縦径 (mm)				横径 (mm)				側径 (mm)			
	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比
あかつき	22.0	22.9	31.6	96	17.1	18.1	26.7	94	14.3	14.9	22.4	96
ゆうぞら	22.7	22.7	32.8	100	16.2	17.1	24.5	95	12.7	13.9	19.8	91
新梢生長	新梢長				展葉数				葉色			
	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比
あかつき	4.1	4.5	6.2	91	9.5	9.4	11.4	101	42.3	42.0	43.3	101
ゆうぞら	4.2	5.3	5.6	79	10.6	9.5	10.5	112	44.9	41.7	40.6	108

注) 平年値は 1996～2020 年までの平均値。

表2 もも品種別の双胚果発生と核障害発生状況（満開後 30 日調査）

	はつひめ	日川白鳳	暁星	ふくあかり	あかつき	まどか	川中島白桃	ゆうぞら
双胚果	本年	11.7	2.5	0.0	4.2	6.7	0.0	0.0
発生率	昨年	0.0	5.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0
(%)	過去10年	8.7	6.5	12.2	5.9	8.7	8.3	7.4
	平年	—	—	—	—	7.2	—	5.1
核障害	本年	11.7	2.5	17.5	0.0	30.0	26.7	3.3
発生率	昨年	25.0	1.7	20.0	2.5	20.8	11.7	1.7
(%)	過去10年	16.7	2.0	13.1	3.2	27.9	25.9	2.2
	平年	—	—	—	—	36.6	—	2.4

注) 平年は 2001～2020 年の平均値、過去 10 年は 2015～2024 年の平均値

表3 もも「あかつき」の発育予測日〔予測方法：発育速度（DVR）モデルによる発育予測〕
（果樹研究所：5月16日現在）

発育予測	開花日		今後の気温経過			気象予報
	昨年	平年	平年並	2℃高い	2℃低い	
硬核期開始日	5月28日	6月9日	6月6日	6月4日	6月8日	6月4日
収穫開始日	7月19日	7月31日	7月29日	7月26日	7月31日	7月27日
収穫盛期日	7月22日	8月4日	8月1日	7月30日	8月4日	7月30日

注1) 平年は 1991～2020 年の平均値

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温（3～4週目の平均気温）を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) 発育予測は誤差を生じる場合があることに留意する

(2) なし

ア 新梢生長

満開後 20 日における「幸水」の予備枝新梢長は 27.6 cm（平年比 113%）と平年より長く、予備枝新梢の葉枚数は 10.3 枚（平年比 92.2%）と平年より少なくなっています。

満開後 20 日における「豊水」の予備枝新梢長は 24.3 cm（平年比 87%）と平年より短く、予備枝新梢の葉枚数は 10.4 枚（平年比 97%）と平年並です（表4）。

表4 なしの新梢生長（幸水、豊水ともに満開後 20 日）

品種	予備枝新梢長(cm)			予備枝葉数(枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	27.6	24.4	113	10.3	11.2	92
豊水	24.3	28.0	87	10.4	10.8	97

注) 平年値：「幸水」の新梢長は 1990～2020 年、葉枚数は 1998～2020 年、
「豊水」の新梢長は 1991～2020 年、葉枚数は 1998～2020 年の平均値

(3) りんご

ア 新梢生長

満開後 20 日における新梢長は、「つがる」が 11.3cm (平年比 86%)、「ふじ」が 13.7cm (平年比 88%) で平年より短くなっています。新梢停止率は、「つがる」が 6.7%、「ふじ」が 13.3% でした (表 5)。

表 5 りんごの新梢長及び新梢停止率

品 種	満開後 日数	新梢長 (cm)				新梢停止率 (%)	
		本年	昨年	平年	平年比	本年	昨年
つがる	20	11.3	14.7	13.1	86	6.7	25.0
ふ じ	20	13.7	17.6	15.6	88	13.3	38.9

注) 新梢長平年値は、1996～2020 年の平均値

供試樹：「つがる」／M.26／マルバカイトウ 19 年生、「ふじ」／マルバカイトウ 22 年生

(4) ぶどう

ア 発育予測

発育速度 (DVR) モデルによる「巨峰」の開花予測では、今後の気温が平年より 2℃高く推移した場合、開花始めが 6 月 2 日ごろで平年より 2 日早く、満開は 6 月 7 日ごろで平年より 1 日早いと予測されます (表 6)。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右されるため、今後の気温の推移により大きく変動することがあるので注意が必要です。

表 6 ぶどう「巨峰」の開花予測 (5 月 15 日現在)

発育ステージ			今後の気温経過と予測日		
	昨年	平年	平年並	2℃高い	2℃低い
開花始め	5 月 27 日	6 月 4 日	6 月 4 日	6 月 2 日	6 月 6 日
満 開	6 月 1 日	6 月 8 日	6 月 9 日	6 月 7 日	6 月 12 日

注) 平年は 1991～2020 年の平均値

(5) かき

ア 発育予測

会津地域研究所 (会津坂下町) における、かき「会津身不知」の開花は、気象庁予報を反映した予測では 6 月 5 日ごろで平年並の見込みです (表 7)。

表 7 かき「会津身不知」の開花予測日 [予測方法：発育速度 (DVR) モデルによる発育予測]
(会津地域研究所：5 月 19 日現在)

	開花日		今後の気温経過			気象庁予報
	昨 年	平 年	平年並	2℃高い	2℃低い	
会津身不知	5 月 24 日	6 月 5 日	6 月 6 日	6 月 3 日	6 月 10 日	6 月 5 日

注 1) 会津身不知の開花日の平年値は、1991～2020 年の平均

注 2) 2 週間予測とは、2 週間までは気象庁が発表している 2 週間気温予報を反映し、2 週間以降の気温は平年値を用いた場合の予測値

4 栽培上の留意点

(1) 防霜対策

開花期から幼果期にかけて対凍性が最も弱くなります。引き続き気象予報に注意し、降霜のおそれがある場合は防霜対策を実施しましょう。ぶどうやかきは展葉期に凍霜害を受けると花器だけでなく新梢も障害を受けるため十分注意しましょう。

最新の情報は、福島地方気象台ホームページ「2週間気温予報」や「霜と気温の見通し」を御確認ください。

「2週間気温予報」：<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/>

「霜と気温の見通し」：<https://www.jma-net.go.jp/fukushima/shimo/shimo.html>

現在の果樹の生育は、各樹種ともに平年より2～6日早まっています。

生育ステージごとの安全限界温度を下回る温度に遭遇するおそれがある場合には、速やかに防霜対策を実施しましょう。

各樹種の生育ステージ別安全限界温度は、農業振興課ホームページの技術資料「作物別凍霜害及びひょう害技術対策（令和7年3月3日）」を参照してください。

URL <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/nogyo-nousin-gijyutu03.html#kisyoku>

事前対策としては、防霜資材を準備するとともに、地温の上昇を図るため下草は5cm程度に刈り込みましょう。また、空気や土壌が乾燥している場合は適宜かん水を実施し、土壌水分を確保しましょう（乾燥条件は気温の低下が著しいため）。

(2) 共通

ア かん水

5月から夏期にかけて果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度のため、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

イ 草刈り、マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう（地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされます）。

また、刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(3) もも

この時期は新梢や果実の生育が旺盛な時期であるので、着果管理や土壌の水分管理等を徹底し、新梢および果実の初期生育を促しましょう。

ア 仕上げ摘果

仕上げ摘果は、果実肥大に差がみられ始める満開後40日頃から実施しましょう。

摘果の程度は最終着果量の1～2割増を目安としますが、樹勢や双胚果、核障害の発生状況をみながら加減しましょう。

核頂部に断裂などの重度の障害を生じた果実は、満開後45日ごろになると果頂部の片側の肥大不良が目立ってくるため、果形に注意して仕上げ摘果を実施しましょう（図2）。

イ 樹勢回復対策

早めの摘果作業に心がけ、必要な着果数まで速やかに摘果し、新梢の生育を促進させましょう。また、乾燥傾向にある園地では、積極的にかん水を実施するなど土壌水分の確保に努めましょう。新梢伸長が劣り、葉色が淡いなど樹勢低下がみられる園地では、早期の摘果により着果量を制

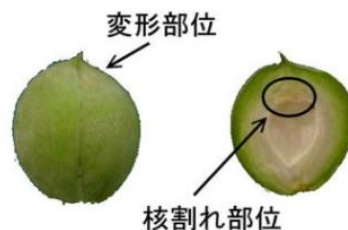


図2 核頂部の障害と果頂部の変形

限するとともに、必要に応じて5月中を目安に速効性肥料（窒素成分で2 kg/10 a 程度）又は窒素成分を含む葉面散布剤を使用して樹勢の回復に努めましょう。

ウ 新梢管理

5月下旬から6月中旬にかけては新梢の生育が最も盛んな時期で、樹勢の強い樹や若木等では樹冠内部が混み合ってきます。樹冠内部や主枝、亜主枝の基部、側枝の基部などから発生する徒長しやすい新梢は、早めに摘心や夏季せん定を実施し、適正な管理を心がけましょう。なお、樹勢の弱い樹では葉面積の確保を優先し、夏季せん定は行わないか最小限に止めましょう。

(4) なし

ア 摘果

予備摘果は満開後30日以内に終了するように努めましょう。ただし、品種により結実状況にバラツキがみられる場合は、確認しながら作業を進めましょう。また、「幸水」の仕上げ摘果は、肥大不良果の除去を中心に行い、満開後50日ごろまでに完了するように努めましょう。

イ 新梢管理

芽かきは、予備摘果と同時に行い、主枝や亜主枝の背面枝はかき取りましょう。不定芽新梢が混み合っている部位は芽かきで2～3本に整理し、適度に間引きを実施しましょう。予備枝は、風により新梢が折損するおそれが無くなったなら先端新梢を一本に整理しましょう。

ウ 樹勢回復対策

土壌が乾燥している場合は、樹勢低下や土壌中のカルシウムの吸収不良による生理障害の発生が懸念されるため、かん水により土壌水分を確保しましょう。

平年より新梢伸長が不良で葉色が淡い場合には、早期摘果により着果量を制限するとともに、必要に応じて5月中を目安に窒素成分を含む葉面散布剤を使用するなど樹勢の回復を図りましょう。

(5) りんご

ア 予備摘果

結実が明らかになりしだい、予備摘果を開始し、満開後30日以内に終了するように努めましょう。原則として中心果を残し、着果の多い樹や樹勢の弱い樹から摘果を行いましょう。

結実が良好な園地では、長果枝や葉の少ない果そう及び肥大不良の果そうの果実は摘除し、着果負荷の軽減を図りましょう。また、えき芽果の着生が多い園地では、早めに摘除しましょう。

なお、予備摘果の際に果柄を取り除くと腐らん病の予防に効果的です。

イ 新梢管理

予備摘果と平行して、主枝や骨格枝の背面、切り口等の不定芽から発生している新梢をかき取りましょう。

ウ 樹勢回復対策

この時期に土壌が乾燥すると、樹勢低下やカルシウムの吸収不足による生理障害を招きやすいため、かん水により土壌水分を十分に確保しましょう。

(6) ぶどう

ア 芽かき

「巨峰」等の4倍体品種における無核栽培では、やや強めの新梢を確保することに心がけましょう。1回目は展葉4～5枚時に副芽や極端に強い新梢を取り除きます。なお、晩霜害の危険がある場合は、副芽の芽かきは次回に行いましょう。2回目は新梢の生育差が明らかになる展葉7～8枚時に誘引作業と併せて行いましょう。新梢が混み合っている部分や、弱い新梢を中心に取り除きましょう。3回目は結実後に新梢の混み合っている部分の手直しや徒長的で結実の悪い新梢をかき取りましょう。

有核栽培における1回目の芽かきは、展葉初期に副芽や結果母枝基部2～3芽をかき取ります。なお、晩霜害の危険がある場合は、副芽の芽かきは次回に行いましょう。2回目は晩霜害の危険がなくなりしだい早めに行い、展葉7～8枚目までに母枝先端の極端に強く花振るいの危険性が高い新梢を中心に整理しましょう。3回目は無核栽培と同様に実施しましょう。

イ 誘引

無核栽培では強めに発生する新梢が多く、早く誘引しすぎると折れる可能性があるため、50cm程度に伸びたところから行いましょう。有核栽培では新梢が30～40cm程度に伸びたところから行いま

しょう。また、「あづましずく」の新梢は硬く基部から折れやすいので、無理に誘引せず時期をずらして行いましょう。

ウ 花穂整形

現在の予測では、開花は平年よりも早くなると予想されます。新梢誘引、摘穂、花穂整形は適期を逃さないよう計画的に実施しましょう。ジベレリン処理時期を逃さないように、花穂整形は遅くとも満開期までには終了しましょう。

(7) おうとう

1 花束状短果枝当たり 3～4 果（樹勢が適正な場合）を目安に早めの摘果を実施しましょう。なお、樹勢が強く新梢の生長が旺盛な側枝ではやや多めに、樹勢が弱い場合は少なめにし、葉数に応じた着果量に調整しましょう。また、結実不良がみられる場合にも、葉数に応じた着果量の確保を優先しましょう。

「佐藤錦」の硬核開始は5月10日ごろ（満開後19日）で、平年（5月13日）より3日程度早く推移しているため、摘果、雨よけ被覆、着色管理などの管理作業が遅れないよう計画的に行いましょう。

5 病虫害防除上の留意点

現在の果樹の生育は、平年より2～6日早まっています（ぶどうは平年並）。また、4月は平年よりも降雨が少なく経過しましたが、4月1、3半旬に降雨があり、各地で病原孢子の飛散や病斑の発生が確認されています。

今後の天候しだいでは、感染が増加するおそれがありますので、気象情報に留意し、生育に応じた計画的な防除を実施しましょう。また、耕種的防除（病斑の除去や新梢管理）を徹底し、発生密度の低減を図りましょう。

(1) 病害

ア リンゴ褐斑病

果樹研究所における子のう孢子トラップ調査の結果、4月23日に初飛散、4月24日、5月12日にまとまった飛散が確認されました（5月13日現在）。例年、飛散のピークは6月上旬頃となるため、今後も降雨の度に飛散が想定されます。

例年、褐斑病の発生が多い場合は、落花2週間後ころにデランフロアブル1,000倍を散布しましょう。また、落花30日後ごろは褐斑病菌（子のう孢子）の飛散盛期となり、重要防除時期にあたります。例年、褐斑病の発生が多い場合は、落花30日後ごろにアントラコール顆粒水和剤500倍を使用しましょう。新梢発生が旺盛となる時期なので、薬剤散布前には新梢管理を行い、枝葉の混雑による散布むらをなくしましょう。

イ リンゴ腐らん病

腐らん病の発生がみられる園地では防除を徹底しましょう。枝腐らんは健全部を5cm以上含めて切り取ります。胴腐らんは周囲の健全部まで5cm広く削り取り、トップジンMペーストを塗布します。伐採した被害枝幹および削りとった病患部は適切に処分しましょう。

早期摘果は枝腐らんの感染防止に有効です。特に「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので、早期に摘果を行いましょう。

ウ リンゴ黒星病

会津研究所における子のう孢子トラップ調査の結果、満開期（5月1日）や落花期（5月7日）にまとまった飛散が確認されました（5月12日現在）。5月12日にもまとまった飛散が確認されており、今後の降雨でも飛散が継続し、感染リスクが高まることが予想されます。そのため、落花2週間後の防除は、前回の散布から間隔を空けないよう注意しましょう。

エ モモせん孔細菌病

本病は、発生初期の密度抑制が重要なため、今後の気象条件によっては発生が急激に増加するおそれがあります。定期的にほ場を巡回し、伝染源である春型枝病斑の早期発見とせん除を徹底し、感染防止を図りましょう。なお、春型枝病斑のせん除は、発病部位が残らないように病斑部の周辺を含めて可能な限り基部から切り戻しましょう。また、樹冠上部での発生を見逃さないように注意し、直下への被害拡大を防止しましょう。

薬剤防除は、降雨前の予防散布を基本に 10 日間隔で実施しましょう。酸化亜鉛水和剤（IC ジンク水和剤）を組み入れた防除体系によって本病の被害を軽減できることが明らかになっているため（令和 6 年度普及に移しうる成果）、落花 30 日後に IC ジンク水和剤 1,000 倍を使用し、被害防止に努めましょう。 なお、銅水和剤（クプロシールド）を使用する際は、薬害の発生を軽減するため、炭酸カルシウム水和剤（クレフノン 100 倍）を、必ずバケツ等で一次希釈を十分に行ってから加用しましょう。 また、薬剤が沈殿しないように攪拌しながら散布を行いましょう。 また、いずれの薬剤も高温時（散布後を含む）の使用や連用は、薬害が発生しやすくなるおそれがあるため避けましょう。

春型枝病斑の発生は長期間にわたるため、せん除は定期的に複数回実施しましょう。

オ ナシ黒星病

果樹研究所における果実での発病は、5 月 7 日に初確認されました。今後の天候しだいでは、感染が増加するおそれがあるため注意が必要です。

防除対策は、果そう基部や葉・果実等の罹病部位を徹底して除去するとともに、薬剤散布は 1 週間間隔で行い、気象情報に留意し、降雨前の予防散布を心がけ、散布むらがないように十分な量を使用しましょう。 新梢発生が旺盛となる時期なので、薬剤散布前には新梢管理を行い、枝葉の混雑による散布むらをなくしましょう。

カ ぶどう黒とう病・ぶどう晩腐病

展葉 5～6 枚期及び展葉 8～9 枚期はこれら 2 病害の防除時期となるため、本病に有効な薬剤を散布して初期の感染を防止する。例年ブドウ黒とう病の発生が多い園地では、パレード 15 フロアブル 2,000 倍を使用する。

(2) 虫害

ア モモハモグリガ

病虫害防除所による調査では、新梢葉での発生割合は平年に比べて高く、一部ほ場では被害程度も高くなっています（令和 7 年 5 月 19 日付け）。

第 1 世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が 2℃高く推移した場合には、5 月 6 半旬ごろと予測され、第 2 世代幼虫の防除適期は 6 月 1 半旬ごろと推定されます（表 8）。

本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意しましょう。

イ ナシヒメシンクイ

第 1 世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が 2℃高く推移した場合には、6 月 3 半旬ごろと予測され、第 2 世代幼虫の防除適期は 6 月 5 半旬ごろと推定されます（表 8）。

本種の第 1 世代幼虫は、主にもも等の核果類の新梢に寄生（芯折れ症状）し、第 2 世代以降はなしなどの果実に移行します。例年、なしでの果実被害が多い地域では、近隣のもも等における防除も徹底しましょう。

ウ カイガラムシ類

ウメシロカイガラムシ第 1 世代のふ化盛期は 5 月 3 半旬頃と推定されます。農業総合センターのうめほ場における調査では、5 月 13 日に歩行幼虫が増加しています。クワシロカイガラムシのふ化盛期はウメシロカイガラムシより 5～10 日程度遅いですが、ウメシロカイガラムシ歩行幼虫発生期に薬剤散布することで、両種を同時防除することができます（令和 5 年度参考成果）。カイガラムシ類はふ化定着初期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないようにしましょう。

ナシマルカイガラムシ第 1 世代のふ化開始は、気温が 2℃高く推移した場合、5 月 6 半旬頃と予測され、ふ化盛期は 6 月 2 半旬頃と推定されます（表 8）。

エ カメムシ類

病虫害防除所における果樹カメムシ類のフェロモントラップデータ（令和 7 年 5 月 19 日付け）によると、県内各地区で誘殺数が平年より多い傾向にあります。越冬世代成虫による加害は、幼果期から始まります。山間及び山沿いの園地では、飛来状況をよく観察し、多数の飛来がみられる場合には速やかに防除を行いましょう。

表8 果樹研究所における防除時期の推定（令和7年5月15日現在）

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 ふ化開始	第1世代 防除適期
2℃高い	5月30日	6月4日	6月13日	6月21日	5月29日	6月7日
平 年 並	6月3日	6月9日	6月20日	6月29日	6月3日	6月13日
2℃低い	6月6日	6月13日	6月27日	7月7日	6月7日	6月19日

起算日：モモハモグリガ越冬世代誘殺盛期 4月22日
ナシヒメシンクイ越冬世代誘殺盛期 4月21日
ナシマルカイガラムシ 3月1日（演算方法は三角法）

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

（以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。）

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>